

—《書評》—

坂元ひろ子著 岩波書店

『中国近代の思想文化史』

(中国研究所編集部) 竹内 翔馬

本書を開くとまず多くの固有名詞が目に入る。人名を挙げれば、誰でも知っているような孫文や蒋介石、教科書に必ず載っているような康有為や梁啓超、中国近代史に通曉している者しか知らないような英斂之や呉稚暉など、その数は膨大であり、新書という形態でありながら、中国近代における主要な政治家、思想家をほぼ網羅していると言えるだろう。

ただ、本書は従来の中国近代思想史の通史や概説書のように、政治動向・政治家・思想家などに即して語ろうとするのではなく、文化史的・社会史的側面に比重をおいて、思想文化という視点から、政治家・思想家を含むその時代における人々の精神のありようを記述しようと試みている。

その際、大きくメディアという軸が設定されている。新聞、雑誌、書籍といったメディアは、他の国の近代でもそうだが、中国近代の思想文化が開花し、伝播していく重要な場となったのである。

さらに、思想文化史のジェンダー化も試みられている。特に中国は科挙制度から女性が除外されてきたこともあり、多くの資料が男性筆者の手によって書かれていたため、男性中心の記述になりがちだった。その問題を解決するために、本書では図像資料などを多く用いて、女性史からの視角によっても記述されている。

このように中国近代の思想文化史における主要な情報をメディアに沿って網羅し、従来的な概説書の役割を担いつつ、その記述を重層化するような視角も設定されている。さらには多くの図像によってより理解がしやすいようになっており、本書は概説書であるばかりでなく、まさに近年の歴史学の知見を広く分かりやすく伝えるものといえ

るだろう。

以下では、本書の内容を紹介していこう。本書は「I 清朝末期とグローバル化」、「II 中華民国と新文化の潮流」、「III 中華人民共和国への展望」と時代ごとに大きく3部に分けられている。

まず「I-1 前近代思想史の俯瞰」では、読者への予備知識として近代以前の思想をおおまかに解説している。仏教・儒教・道教の三教が成立し、それぞれが盛衰しながらも文化を形成し、次第に合一の方向へと向かっていく。清代に至ると纏足の普及、儒教の多くの社会階層への拡大とともにジェンダー規範、社会システムが構築されていった。一方、政治思想では、清代の版図の拡大によって多民族的国家を形成することとなり、華夷思想が強く意識されていく。さらにそこへ宣教師の来航によって西洋の文化との接触が起り、近代へと展開してゆく。

「I-2 西洋文明との遭遇から洋務へ」では、白蓮教徒の反乱、太平天国の乱、第一次・第二次アヘン戦争、日清戦争などが起こるなかで、徐々に清朝が傾いてゆく。そんななか、中国の文化を存置しつつ、西洋の学問やインフラを導入しようとする「中体西用」論が志向されるようになる。それらの思想を担ったのは、曾国藩、李鴻章らのブレーンである幕僚たちだった。しかし、「中体西用」論の限界性もまた露わになってくる。メディアに関しては、キリスト教宣教師らの出版活動を嚆矢として、印刷文化が徐々に活発化し、『申報』などの商業新聞も発行されてゆく。ジェンダーの観点では、太平天国運動は必ずしも「女性解放運動の起点」ではなく、多くの女性への暴行迫害もあったという点も指摘している。

「I-3 変法運動期の伝統の創造」では、日清戦争敗北後の危機感から、中国の制度の変革を目指す変法運動が起こってくる。その運動を担った康有為や梁啓超は、『万国公報』、『時務報』などのメディアを活用し言論活動を行った。また嚴復

が『天演論』で紹介した社会進化論は、変法期の思想家に大きな影響を与え、種族の生存というものが強く意識されるようになる。またその頃、纏足批判の運動も高まってくるが、纏足の女性に対し、「国の恥」といった蔑視や、優生学的な発想も見られるようになってくる。

「I-4 清末立憲準備と民族／共和革命」では、義和団事件の敗北により、清朝に対する批判が強まっていき、孫文らの革命団体が台頭してくる。そこでも『民報』、『大公報』、『時報』などのメディアが活用され、出版文化が花開いてゆく。一時は「無権の君主」を据える「虚君共和制」でまとまりかけるが、清朝の国会開設は延びて時機を逸し、革命へと雪崩れこんでゆく。

「II-1 「共和国」の成立」では、清朝が倒され、中華民国が成立するが、袁世凱の帝政宣言と撤回、北京政府の主導権争い、軍閥の割拠など、社会は混乱してゆく。しかし、そのような時代のなかでも教育改革や、『新青年』の文学改革運動、社会主義思想、共産党の活動など様々な思想、運動も沸き起こる。ジェンダーに関しては、新政府成立後も女性参政権は時期尚早と後回しにされ、専ら恋愛、結婚、家庭などの問題へと焦点が絞られてゆく。そのなかで産児制限が家父長制への批判として多くの議論を起こすが、しかしそこには生殖の「量」ではなく「質」を問う優生学的な思想がやはり影を落としていた。

「II-2 南京国民政府期の文化建設」では、北伐が完了し、南京国民政府による中国の統一が成し遂げられるが、満洲事変、日中戦争も起こり始め、さらには国民党と共産党の対立も深くなっている。上海などの大都市では都市文化が開花し、新生活運動、「モダンガール」なども登場していくが、全体主義や復古主義を背景として「女は家に帰れ」論も強まってくるようになる。

「II-3 抗日戦争期以降の文化と思想論戦」では、日中戦争が全面化し、抗日統一戦線が完成す

る。国家の制度がうまく固まらないまま清朝が倒され中華民国が成立してしまったため、国家の制度づくりをどうするかという点について、引き続き様々な論戦も繰り広げられる。その頃の日本軍による被害は人命への危害だけではなく、文化面でも大きな打撃を被ったが、しかし共産党の革命根拠地であっても、毛沢東による整風運動、文芸講話などにより自由な文化活動が許されたわけではなかった。ジェンダーの視点でも女性の主体性よりも戦時女性工作が優先され、フェミニストたちも批判にさらされた。

「III 中華人民共和国への展望」では、抗日戦争の「惨勝」後、国共内戦とまたしても戦争へと突入していく。1949年に共産党の勝利により、中華人民共和国が成立するが、思想統制や文化大革命などで思想家、文化人なども多大な被害を受ける。1950年の新婚姻法で、男女の自由意志に基づく結婚と離婚が保障され、大躍進期には多くの女性が労働に参加することとなった。その労働に喜びを見出す女性たちもいたが、それは政策による労働動員であり、大躍進の失敗のちは再び「女は家に帰れ」などの論も起り、自主的な労働とはいえないかった。生殖政策についても、1978年に一人っ子政策が開始され、優生保育が強調された。

以上ざっと本書の内容を概観してみたが、情報量は膨大であり、記述は多岐にわたるため、ここに記したのはほんのわずかな部分である。前述したように、多くの思想家・政治家、文化人、政治運動や具体的な出版物名が網羅されており、また女性史からの視角によっても記述され、それまでの近代思想史を重層化させる役割も果たしている。

新書であるので多くを望むべきではないかとも思うが、索引があれば読むにあたって便利になつただろう。

また、第III部で近年の少数民族・民主化・メディア統制などの諸問題にもほんの少しであっても

触れてほしかったところである。

本書のいちばんの問題点を挙げるとすれば、近代思想史の詳細な記述と表裏をなすが、「あとがき」にも記されているように、やはり本書は都会の漢人知識人に集中している傾向があることである。中国近代思想史の重層化という点に関して、いま一歩進めてよかったですのではないかと思う。しかし、本書を読了したことによって、中国近代思想文化史において、政治・思想、メディア、女性史以外にどのような視点から見ることができるか、ということもまた想起されてくる。

以下では、中国近代思想史を重層化あるいは相対化するにあたってどのような視点が考えられるか、いくつか考察してみたい。

第1は、自然科学とその応用としての工業技術についてである。近代になり、人間の理性が重視され、自然を客観的に記述、分析しようとする試みが盛んとなり、自然科学が発達していった。本書でも大学の理系学部の創設などが触れられているように、中国でも自然科学は受容され、展開されていったはずであるが、それはどのようになされていったのだろうか。また、自然科学の応用である工業技術も近代には劇的に進歩してゆき、人間の生活様式も大きく変化していった。本書でも中国が西洋の工業技術を採用し、近代化してゆき、大都市では鉄道、電気、電信設備などのインフラ整備について記述されているが、それを享受する人々は何を思つただろうか。例えば茅盾の小説『子夜』の冒頭で、上海の高層ビルのきらびやかなネオンと、疾走するシトロエンにあてられ、憤死する老人が登場するが、実際に新たな技術に慣れてゆくには時間もかかることであり、そこには大きなストレスもあったと思われる。本書の終わりのほうで、中華人民共和国の原子力発電所建設に関して「民国以来の科学信奉」(268ページ)とあるが、西洋化を全面的に受け入れるわけにはいかないという思想家たちの考えには、政治・人権など

の思想面とは別に、新しい技術に対する拒否感というものもあったのかもしれない。

第2は、文学である。「本書では文学はむしろ最小限しかとりあげないことをお断りしておきたい」(iiiページ)とあるように、文学についての記述はそれほど多くはない。ただ魯迅らの文学運動は、政治思想とも密接に関わっており、陳独秀らの白話運動も国語改革に大きく関連しているため、もちろん本書でも触れられている。ただ、文学、特に小説や戯曲において、政治や国語改革という外的な要素だけではなく、テクストの内面もまた変化していったはずである。ミラン・クンデラが、小説とは「西洋近代の発明」である、と述べているように、それまでの神話や民話ではなく、個人が近代的理性という内的関連によって、それぞれが生活する世界を表現しようという試みは、前近代までの物語を記述する方法とは異なるであろう。本書でも記述されている周作人の個人主義の立場からの「個人の文学」という主張や、田漢や夏衍のリアリズム作品もそういった意識に支えられているのではないかと考えられる。

第3に芸術に関する分野である。近代における芸術は、複製技術の進歩と、それに付随するメディアの発達と不可分であり、ヴァルター・ベンヤミンが言うように、作品それ自体が存在することによって発せられる神聖性が剥奪され、近代以前の芸術とは異なると考えられる。本書では、もちろんメディアという点が重視され、映画、漫画等に目を配ってはいるが、絵画や彫刻といった点については少ない。近代の芸術は政治運動とも関わってくるが、中国近代の芸術家たちはどのように考え、どのような意識のもとに作品を制作したのか、ということは気になる点である。

第4は、マイノリティによる視点である。近代国民国家を志向しようとすると、必ず民族という問題——国民国家の領域に含まれる人々が民族という枠に分類され、峻別あるいは統合されるとい

う難題が立ちはだかってくる。孫文らの提案した「五族共和」という概念や、大同思想による「中華民族」の統一という概念、費孝通の「中華民族の多元一体構造論」などは、本書でも紹介されているが、少数民族側からの視点は少ない。「蛮族」として博覧会で展示された人々は、何を思つただろうか。また、漢族主導による国民統合の思想をどう感じたのだろうか。これは現在の少数民族の独立問題などと関連することであり、より詳しく知りたいところである。

第5は身体の近代化という視点である。近代とは、人間の身体を近代的人間として作り変えるといった点も志向される。本書では、纏足からの解放などに象徴されるように、女性の身体が近代化される状況について述べられているが、子供についてはどうだろうか。フィリップ・アリエスは、近代以前には子供は小さな大人とみなされていた

が、近代となり新たに教育を施すべきものとして定義しなおされた、と指摘している。本書でも言及しているように、近代的な教育制度が中国でも行われ、近代国家建設のために教育が重要であると見なされているのであるが、子供の身体をめぐっては、どのような議論がなされたのだろうか。また、ミシェル・フーコーは前近代ではそのまま共同体のなかに置かれていた「狂人」が収容され矯正されていくところに近代的なものを見出したが、中国の近代ではその問題はどのように展開したのだろうか。

少し長く書きすぎたかも知れないが、本書を読み終え、中国の近代について様々なことを考えさせられた。本書が中国近代の思想史の入門書として広く読まれていてほしい。

(2016年5月刊、284ページ、本体880円+税)

◆研究会員制度のご案内◆

当研究所は、中国研究者および広く中国に関心のある方々の参加と交流を目的とした個人向けの研究会員制度を設けております。中国研究所の趣旨をご理解の上、ご入会をご検討いただけた幸いです。

【年会費】 一般会員 9,600円 学生会員 5,000円

【会員特典】

- ・『中国研究月報』の無料配布（月1部）
- ・附属図書館の閲覧料無料
- ・中国研究所主催の研究会などのご案内・参加料割引（無料招待もあり）
- ・中国研究所発行物の割引購入

当研究所刊行の出版物（『中国年鑑』など）を、定価より1割引にて提供いたします。
そのほか、詳細はお問合せください。

一般社団法人中国研究所

〒112-0012 東京都文京区大塚6-22-18 電話：03（3947）8029 FAX：03（3947）8039

E-mail：c-chukens@tcn-catv.ne.jp URL：http://www.chukens1946.or.jp/